# 分娩前に乳房炎を治療する技術

家畜部

## 1　背景、目的

乳牛は細菌感染により乳房炎になりやすく、特に分娩後に発症しやすい傾向があります。乳房炎になると乳牛の元気がなくなり、牛乳の風味が悪くなるので、せっかく搾った牛乳を捨て続けなければなりません。

分娩前に乳房炎を治療することで分娩後の発症を抑えられると、捨てる量を大きく減らすことができ、酪農家にとっては画期的な技術となります。

そこで、当場で分娩前に１回診断・治療するだけで、多くの乳房炎が治る方法を確立しました。

## 2　成果の内容、特徴

１）分娩の７～10日前に乳汁を検査し、乳房炎の場合は抗生物質（セファゾリン（CEZ）450mg入り）を１回、乳房内に注入します（図１）。

２）主要な原因菌のブドウ球菌やレンサ球菌による乳房炎の治癒率は80％以上もあります。また、治りにくいと言われる腸球菌や大腸菌などによる乳房炎も半数以上が治ります（表１）。

３）炎症反応の指標となる乳汁中の体細胞数は、15万個/ml以下まで低下するので、大きな治療効果が得られます（図２）。

## 3　主要なデータなど

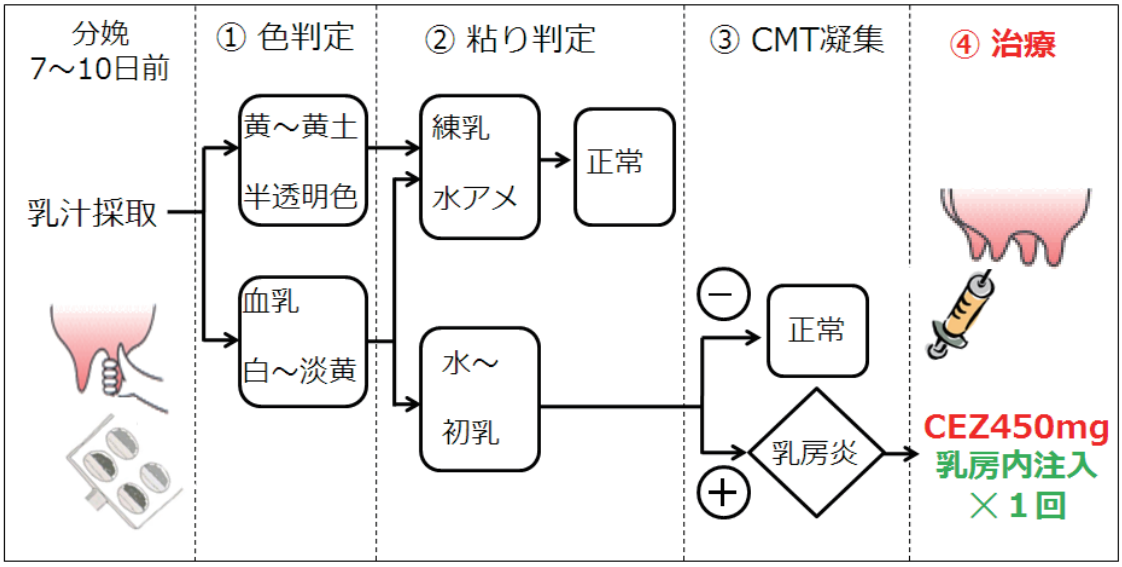


図１　分娩前に乳房炎を診断し治療するまでの流れ

注）１．①～③の診断法の詳細は平成22年度成果情報を見てください。
　　２．CMT凝集はPLテスターを使用します。
　　３．治療後は分娩まで放置。初乳は７日間廃棄します。

表１　治療成績

| 原因菌（症例数） | 治癒率（%） |
|---|---|
| ブドウ球菌（35） | 80 |
| レンサ球菌（ 9） | 100 |
| 腸　球　菌（14） | 64 |
| 大腸菌類（11） | 55 |
| その他の菌（26） | 77 |
| 全　　体（95） | 76 |

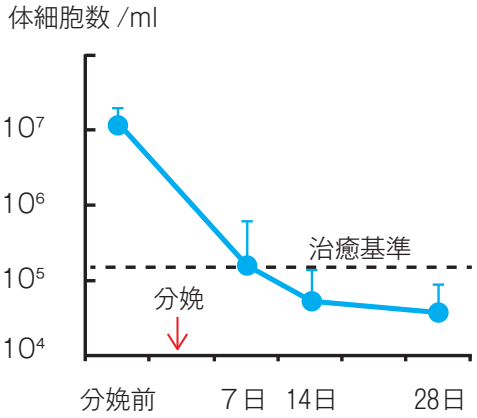


図２　治療後の体細胞数の変化

注）１．治癒基準は15万個。
　　２．縦棒は体細胞数の標準偏差を示す。